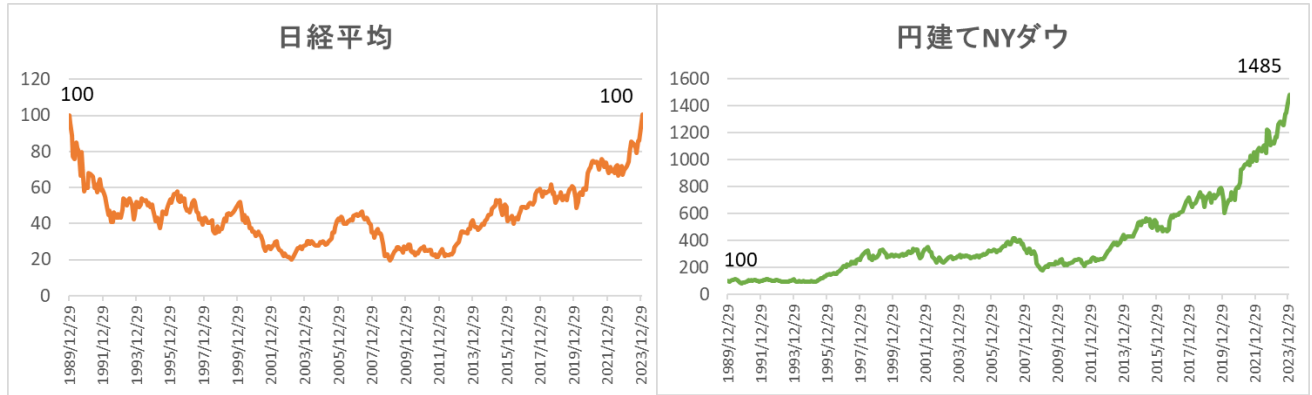


ATTENTION

34年間の彼(米国)、我(日本)の差は、これほど大きかった



日経平均が2月22日、34年ぶりにこれまでの最高値を越えました。「長かったあー」というのが、実感です。世界でも、これまでの高値に戻す期間が最も長かったのは、米国の1929年～1954年の25年でした。世界記録更新が止まったのにも、ほっとします。このグラフでは、ニューヨークダウを円換算していますが、そうするとおもしろい比較ができます。日経平均のバブル時最高値の時(1989年末)、円は1ドル143円。その後、円は95年5月には1ドル83円になり、円高もあり、円建てNYダウは5年半横這いでした。一方、ご承知のとおり、日本はバブル崩壊で、その95年5月の時点で最高値から63%も下がりました。それで止まったかということ、とんでもありません。98年には最高値から3分の1になり、2001年9月には4分の1、2003年4月には5分の1になったのです。その後は低位で横ばいでしたが、2009年2月にはリーマンショックで、ダメ押しの5分の1未満になりました。そして、2012年9月まで横這い。きびしい時期でした。一方の円建てNYダウは2002年3月には1989年末から3.5倍になりましたが、2009年2月には、96年10月とほぼ同じレベルに下がりました。12年1月の1ドル76円という円高もあり、12年10月まで上がりませんでした。その後はご覧のように上がり続け、日経平均の1989年バブル最高値時から、14.8倍となったのです。一方で、日本はやっと34年前の水準に戻ったということです。この差は見た目以上に大きいです。まさにその時代を生きた人たちの人生を左右したものといっただいでしょう。

COLUMN

最高値更新の米国市場はバブルか？

米国株式市場は、今年に入り、主要3指数(ニューヨークダウ、S&P500、ナスダック総合)とも、最高値を更新しました。その上げ振りは、加速しているようにも見えます。こうなりますと、出てくる声が「バブルではないか」。実際に、米国市場でそのような心配の声が出ていることは事実です。さて、いかがでしょうか。私は、はっきり「バブルではない」と言っておきましょう。その背景をお話します。まず、第一は、最高値更新といっても、大きく下がった後の更新ですから、どんどん高値を追うということではないということです。S&P500の今回以前の最高値は2021年12月、そこから最安時点で24.8%も下がってから戻しての更新です。また、ナスダック総合の高値は2021年11月、そこから35.7%も下がっての更新です。言ってみれば、現在の状況は、以前のレベルに戻ったばかりなのです。昨年1年は、FRBのきつい金利上げに苦しめられたわけですが、ようやく止まったばかり。まだ下げる話も出ていません。まだ下げているのに、最高値更新ですから、いったん明確に金利が下げだしたら、さらに力強く上がっていくでしょう。1999年のインターネットバブルの時のように、ドット・コムと名前が付けば、利益が出ていなくてもどんどん上がるという状況でもありません。エヌビディアなどが派手に上がっていますが、これもしっかりと利益が出ていて、その有望性を買っての株価上昇です。昨年あたりのマーケットの低迷期でも、米国の景気は実は悪くなかったのです。おそらく、今年の米国市場は、本格的な上げ相場となることでしょう。

MARKET

	(2月末)	(1月末比)
日経平均	39,166.19円	+2,879.71円 (+7.94%)
NYダウ	38,996.39ドル	+846.09ドル (+2.22%)
米ドル	150.00円	+3.05円 (+2.08%)

私の書棚より

常に近道を行け。近道とは自然に従う道だ。

-マルクス・アウレリウス『自省録』

今年も来ました！バフェットの「株主への手紙」

毎年2月の最終土曜日に届く、バフェットの「株主への手紙」。この手紙はバフェットが書き下す唯一のもので、バフェットが家族のように大切にしている株主に語り掛ける言葉には、バフェットの知性と人間性、80年に及ぶ深い洞察が現われています。いつ読んでも学ぶことが多い内容です。今年の「株主への手紙」の内容を紹介しましょう。

冒頭は、1ページにわたる、昨年11月に亡くなった盟友、チャーリー・マンガーへの追悼メッセージです。そのタイトルは「パークシャー・ハサウェイの設計者」。パークシャーの形をつくったのはマンガーで、自分は建築一括請負人、建設工事の担当者というのです。そこまで正直に言うかと、半分呆れてしまいますが、本文を読むと、まさにその通り。衝動買いで買った繊維会社のパークシャーを投資会社に作り替えたのは、マンガーだったのです。手柄を自分のものにせず、常にバフェットを立てる。バフェットにとってマンガーは、「ある時は兄であり、ある時は愛すべき父」だったというのですから、いかにマンガーの存在が、バフェットにとって掛け替えのない存在だったかがわかります。

この手紙の中で、バフェットは私たちにとって大事なことをいくつか言っています。昨年の「手紙」でも取り上げたコカ・コーラとアメリカン・エクスプレスへの投資を取り上げ、「忍耐」が報われると述べています。1995年に投資したアメリカン・エクスプレスは25倍になり、取得ベースの配当利回りは、毎年配当を増やすので、いまでは28%にもなっています。コカ・コーラの取得ベース配当利回りは57%です。1年

で投資額の半分以上の配当金をもらっています。2つの銘柄とも毎年増配しているの、さらに増え続けるでしょう。

そして我々にとってうれしいのは、日本の商社株への投資について、1ページを割いて紹介していることです。昨年末には、5社の株式をそれぞれ9%ほど持っているとのこと。2020年8月に、この商社株買いが公表されたときには、5%を少し超える程度でしたから、大幅な買い増しになります。買い始めて以来、株価は大きく上昇し、1.6兆円の投資額はほぼ2倍になっています。増配もしていますから、バフェットにとっては、アップルに続く大成功投資となりました。日本人としてうれしい限りです。2023年4月の来日時に、日本株へのさらなる投資意欲を示したことが、34年ぶりの日経平均の最高値更新の起爆剤になったことは、改めて、バフェットの世界の投資界への影響力の強さを感じさせます。

またバフェットは、日本の商社のトップの報酬が、米国に比べて慎まじやかだとし、暗に米国の報酬が高すぎることも示唆しています。

今年の株主総会は5月4日、ネブラスカ州オマハで開催されます。私は、2014年から出席し、今年も馳せ参じる予定ですが、マンガーがいない総会。バフェット自身、これまでずっと隣に座っていたマンガーがいないのはさぞ寂しいことでしょう。それは、株主総会に出席するすべての株主にとっても同じですが、バフェットがこの「株主の手紙」で述べているように、オマハの空気を吸い、その水を飲み、世界中から来る株主と語りあえば、得るものは大変大きいのです。

まかせて安心、資産運用のホームドクター

- 大切なお金を間違いない方法で運用しているのか、心配になることはありませんか。
- 退職後のセカンドライフを、お金の心配なく、ゆとりを持ってお過ごしですか。
- 仕事が忙しくて、なかなか運用まで手が回らないということはありませんか。
- 銀行や証券会社が勧めるままに、株や投資信託を購入していませんか。

金融商品の中身や手数料がどうなっているか、きちんと把握していますか。

びとうファイナンシャルサービスは、金融機関から完全独立のFP・資産運用アドバイザーです。その強みを生かし、お客様に、客観的で、公正・中立なアドバイスを提供しています。手数料が高く売りやすい商品をお客様に勧めるのではなく、お客様にもっとも適した金融商品をお客様にベストのアドバイスを提供しています。

びとうファイナンシャルサービスは、お客様の目標や夢の実現のため、40年を超える長い経験と深い専門知識、高い倫理観をもとに、お客様の利益のみに目を向けたサービスを提供しています。たとえるなら、多くのお客様の人生という航海で、無事に目的地に到着する大型客船であり、いつもお客様の資産運用という面で健康管理をするホームドクターです。



びとうファイナンシャルサービス
代表 尾藤 峰男
公認投資助言者(RIA)

びとうファイナンシャルサービス 公式HP

<http://www.bfsc.jp>

あなたの資産運用を成功に導くメルマガ！

お申し込みは <http://www.bfsc.jp/mailmagazine/>

発行者：びとうファイナンシャルサービス
代表取締役 尾藤峰男

電話：03-6721-8386
携帯：070-5567-3311 電子メール：info@bfsc.jp